国際平和論の日本的祖型

——その1『廿世紀之怪物帝国主義』——

久保田　順

1. はしがき　愚童忌
2. 資本主義分析の理論としての帝国主義論
3. 日本資本主義形成期の時代的制約
4. 帝国主義認識の形成過程
5. 日本型帝国主義論の展開
6. 小括　今日の平和主義として

1. はしがき　愚童忌

足柄の　けわしげな　箱根の山よ
大平台に　君のみたまは　ねむれるか
いたましや　愚童さん

明治のはつる頃　ひとびとのこころ
ただしきことを　この国びとをすくわんと
命を捨てた　愚童さんよ

私が参会した1989年の愚童忌（1月24日）は，陣逞玖磨氏の新詞曲による上掲の「愚童忌の歌」が披露され，氏のピアノの伴奏による女性歌手の歌唱，そして参会者の唱和によって始められた。神奈川県箱根の大平台・林泉寺の本堂は百名をこす参会者でうずまっていた。内山愚童が住職をしていた林泉寺の本尊を安置した台座の下を，裏へ回ってのぞきこめば，そこに地下牢のような穴倉のような暗い空間がある。愚童は活字を買いこみ，ここを秘密印刷所として平民社にあった読者名簿を利用し，刷り上げた秘密文書をかたっぱしから送りつけたという[1)]。

内山愚童にかんしての新発見の資料にもとづく研究者の報告，そしてまた当日の参会者中の最高齢者であるのは間違いない丸木位里画伯の熱情のほとばしる語りなどが続くなかで，とくに記しておきたいのは某氏のおよそ次のような発言であった。即ち内山愚童こそ，「徹底した

1) 内山愚童を検挙したのは横浜地方裁判所検事正・大田黒正男で，神奈川県，群馬県の「主義者」取調べについて指揮し，湯河原・天野屋宿泊中の幸徳秋水逮捕にむかったのも彼であった。この「大逆事件」に直接かかわり合いをもった現職検事正によって記録された「幸徳傳次郎・森近運平」の伝記がある。『幸徳秋水全集』別巻1，明治文献，1972年。561～628ページ。

主権在民」の思想家であることを強調され，さらに話がおよぶところ，箱根登山電車の大平台駅前に神奈川県は県として「主権在民思想の発祥の地」と刻んだ記念碑を建てたってよいではないかとの提言であった。

本年の愚童忌は，私の，そして参会者の誰れもの胸のうちに，「主権在民」と「主権在天皇」の両極の構図が焙りだされるように浮び出ていたであろう。数カ月におよぶ下血と輸血の報道，「自粛」のとめどない蔓延，そして私たちは1989年1月7日・8日をむかえ，そしてまた日ならずして大逆事件[2]処刑日の1月24日の愚童忌がやってきたのであった。「徹底した主権在民」という発言は，愚童理解の新しいキー・ワードのように参加者を誘いこむ響きがあった。

内山愚童研究について一本にまとまったものとしては，当日も参会し発言された柏木隆法氏の『大逆事件と内山愚童[3]』がある。僧職に就くつもりもあった著者は，「アナキスト愚童」

---

2)　「大逆事件」の真相と裁判の概要を適切に整理され提示されている文章につぎのものがある。

「今日では『大逆事件』の真相は，わずか数名が企てた幻想的な天皇暗殺計画が唯一の手がかりとして，いっさいの反体制運動を抑圧するために当時の天皇制国家権力が「一大陰謀事件」につくりあげていった計画的犯罪であったことはあまねく知られる事実となっている。《一つ》の「大逆罪」に結びつけられていった『大逆事件』の具体的内容は，二つの部分から構成されていたことも明らかにされている。

すなわち，その一つは，日本の絶対主義的国家権力の打倒をめざしたものであり，その手段として天皇個人の暗殺を企てたものである。宮下太吉，管野スガ，新村忠雄，古河力作の4名ないし別件（皇太子暗殺計画）内山愚童をくわえた5名（いずれも死刑）がその関係者に該当する。

他の一つは，社会主義ないし無政府主義思想をいだき，あるいはその同調者，同情者であったという理由だけで『大逆事件』に関連づけられ，《逆徒》にしたてられたものである。幸徳秋水をはじめ，大石誠之助，松尾卯一太，成石平四郎，森近運平，新美卯一郎，奥宮健之(以上死刑)，高木顕明，峰尾節堂，坂本清馬，飛松与次郎，佐々木道元，崎久保誓一，成石勘三郎，岡本潁一郎，武田久平，三浦安太郎，岡林寅松，小松丑治（以上，無期懲役），新田融（懲役11年），新村善兵衛（懲役8年）の21名は，無実の罪で処刑きれた。

ところで，大審法廷が決定した『大逆事件』判決は，つぎの三つの事実関係を一つにつくりあげ＝デッチ上げていったものである。

第一の事実は，長野県明科製材所の職工長宮下太吉が，1909年2月いらい管野スガ，新村忠雄ないし古河力作とともに，天皇暗殺を謀議し，同年11月3日，「大逆」に使用する爆裂弾の試作に成功した，といわれているものである。「爆発物取締罰則違反」事件として検挙された，いわゆる「明科事件」。これがやや具体性をおびた『大逆事件』の本体であり，唯一の手がかりとなった。

第二の事実は，皇太子の暗殺を計画したといわれるものである。1909年5月，内山愚童は「天皇より皇太子をやっつける，セガレが死ねばオヤジはびっくりして死ぬ」と放言し，その「革命談」(?)を聞いたという理由だけで，武田久平，三浦安太郎，岡林寅松，小松丑治はこれに関連づけられた。

第三の事実は，いわゆる「11月謀議」とよばれる「架空の謀議」である。すなわち，1908年11月，東京の巣鴨平民社で，秋水は，森近運平，大石誠之助と，日をかえて松尾卯一太とともに「決死の士」をつのり，「爆発物と兇器とをもって暴力革命を企て，富豪の財産を焼き払い，重要な地位にある高官を暗殺し，大逆をおかすべく宮城をおそう」謀議をなしたとされるものである」大原　慧『幸徳秋水の思想と大逆事件』青木書店，1977年，268—269ページ。

と呼称される存在を超えた愚童の人間像を織りあげようとされている。「〈個人〉はさまざまな側面をもっている。つまり社会主義運動にとらわれない一個の人間からみれば，愚童は林泉寺の住職として貧苦にあえぐ農民の同情者であり，同時に曹洞宗教団に対する批判的精神の持主だったのである。明治の廃仏毀釈以降，日本の仏教教団は大きく揺れ動いた時期でもあり，国粋主義的なナショナリズムが胎動する雰囲気の中で，若い仏教者たちは宗弊一洗の難問に自問自答していた。内山愚童もまたそうした仏教者の一人であった。

内山愚童の思想は決して完成していたものとは思えない。僅かながら遺稿『平凡の自覚』を通して自分の立場を明らかにしようと努力していたことは認められるが『其方法トシテハ』と書き及んだところで結論が出ないまま死刑が執行されて38年の生涯が閉じられてしまったのである。見方変えれば仏教の変革性を後世に問うたまま逝ってしまったのである。『この法平等にして高下なし』という金剛般若経の一節は，愚童の生涯変らぬ信念であったが，あまりにも資料に乏しく多くの謎を秘めたまま黄泉へと旅立った[4]」と。

私が，1989年の愚童忌の堂宇の一隅に座して聴く，明治の大逆事件からの「遠い声[5]」も，たんに「アナキスト愚童」と，歴史的思想的に位置づけられるものを超えて，「徹底した主権在民」，「この法平等にして高下なし」の思想から発する平成時代へのメッセージとしてであった。

本稿は，明治30年代の前半期において発せられている「遠い声」を，幸徳秋水の古典『廿世紀之怪物帝国主義[6]』（以下，秋水の古典と略記）のなかに聴きとりたいとするものであり，まさに「吾人は世界の平和を欲す，而して帝国主義は之を攪乱する也」とする古典から，国際平和論の日本的祖型を形成する要素を摘出し，それが今日の国際平和論の形成にあたってどのような意味をもつこととなるのか，そこを聴きとりたいとする試みである。

2. 資本主義分析の理論としての帝国主義論

戦前の天皇制下の政治状況，侵略戦争の遂行のなかで闇のなかにとざされて解明すること，触れることさえ不可能であった幸徳秋水研究は，戦後にいたって，神崎清，糸屋寿雄，田中惣

---

3) 柏木隆法『大逆事件と内山愚童』ＪＣＡ出版，1979年。

4) 同上書，４ページ

5) 瀬戸内晴美『遠い声』新潮社，1970年。管野須賀子をとりあげた伝記小説である。以下は新潮文庫版（1975年）の解説（鶴見俊輔氏）の末尾の文字である。
「このつくりあげられた犯罪の犠牲者の一人坂本清馬は15年戦争の敗戦後まで生きのこって無実を訴えつづけ，裁判のやりなおしを戦後に要求したが，裁判所のうけつけるところとならなかった。大逆事件は明治末にすぎさった事件ではなく，今日の日本の政治によってひきつがれているのである。
この伝記小説は，明治末の獄中で発せられたと思われる小さいつぶやきを今日の耳にききとり，その遠い声を，日本の現代に対置する。」

6) 幸徳秋水全集編集委員会編『幸徳秋水全集』第三巻所収，明治文献。飛鳥井雅道編『幸徳秋水集』（近代日本思想大系13）筑摩書房，1975年。伊藤整編『幸徳秋永』（日本の名著44）中央公論社，1984年。他に岩波文庫版。

五郎，塩田庄兵衛，渡辺順三，吉岡金市，大原慧，井口和起，飛鳥井雅道氏らの諸研究によって新資料の発掘もすすみ急速に進展した。大逆事件についても1961年「再審請求」がなされ，108点にのぼる新証拠書類も提出されたが，1965年に「棄却」され，そのまま経過している[7]。戦後，夥しい数の秋水および大逆事件関連の諸文献がでているが，近来，もっとも新しい問題提起の書として大谷渡氏による管野スガにかんする評伝（1989年5月刊）が上梓されたこともあげておきたい[8]。

秋水の古典『廿世紀之怪物帝国主義』を直接論評した論稿も数多く発表されているが，その多くに共通にみられる，この古典にたいする基本的性格づけはおよそつぎのようなものであった。①近代資本主義の特定の段階としての把握に欠ける。②変革の主体を認識せず，上からの訴えで。③レーニンの方法とは別物である。④克服策としての社会主義的具体策なし，といっ

7）大内兵衛，我妻栄，宮沢俊義，大河内一男，南原繁の5氏も，1965年1月，連署をもって長谷川裁判長にたいし，「非公開の秘密裁判のなかに閉鎖され，ながい間歴史の謎とされていたこの大事件も，時代の進展にともない，新資料の発見と学問的研究により，次第にその真実の姿をあらわすようになってきました。新憲法下において，国民の基本的人権救済の道を開いた再審制度のおもい意義を考え，司法権独立の権威をたかめ，かつ国民の疑惑をとくために，英知と勇断とをもって，再審開始の決定をくだされるよう」要望書を提出している。

8）大谷渡『管野スガと石上露子』東方出版，1989年。大谷氏は管野スガの人物像が荒畑寒村の自伝における記述一性的放縦性の強調にそのまま依拠してえがかれている点を批判している。「管野に関する伝記的研究のなかでもっとも流布されている絲屋寿雄『管野すが――平民社の婦人革命家像』（岩波新書，1970年）においても，管野のキリスト教への接近は，もっぱら荒畑の回想に依拠して説明されていた。1980年に邦訳出版されたF・G・ノートヘルファー著・竹山護夫訳『幸徳秋水――日本の急進主義者の肖像』（福村出版刊）では，管野が「娼婦の生活」に沈み「貞操の切り売り」をしていたなどという明らかに誤った記述がなされておりながら，同書の訳注においてこの箇所は訂正されないままになっていた。『寒村自伝』の管野に関する記述とこれに依拠した従来の研究傾向が，こうした思わぬ誤謬を生じさせたというべきだろう。

実名を使った瀬戸内晴美の小説『遠い声』では，「別れた夫とあの意地悪い姑（しゅうとめ），立命館の中川小十郎，牟婁新報の毛利柴庵，六大新報の清滝智竜，伊藤銀月，荒畑寒村……私の上を通りすぎた屑のような男たち……」と書かれたように，管野スガの虚像が露骨きわまる形で創作されていた。それだけではない。中川小十郎はじめ歴史上のそうそうたる人物に虚構の女性関係がつくりあげられた。雑誌『世界』1984年3月号掲載斎藤茂男「断章・東京Xデー――不思議な光景を歩く」では，この瀬戸内晴美の『遠い声』でつくりあげられた虚構の管野スガ像がそのまま用いられ，管野の虚像が再生産されている。

1987年刊行の永畑道子『華の乱』（新評論）には，「男たちとの遍歴のあとも華やかな，すが子である。すが子の唇は厚ぼったい。たわわの髪，どこか男を惹きこむ魅力があった」などと書かれていて，彩色の施された管野の虚像がますます一般に流布される傾向が生じている。それだけに今，管野の実像を明らかにしておくことは，重要である。管野スガの実像は，これらの書物が描くような虚像とはまったく異なったものだった。彼女は，女性解放運動のすぐれた先駆者としての女性だったのである」（10―11ページ）。

大谷氏による管野スガ虚像説批判については上掲の諸氏からの応答が期待される。

たところに基準がおかれているようにみえる。いいかえれば1901年刊の幸徳秋水の帝国主義論と，1902年刊のＪ・Ａ・ホブスンの帝国主義論，1916年刊のＮ・レーニンの帝国主義論との方法的比較が基点あるいは背景におかれ，そこから秋水になにが足りないか，とする論稿にほぼ占められていたといってよい。それはまた，この三者の対象とした歴史的現実が，日露戦争前夜，ボーア戦争期，そして第１次世界大戦前夜といった違いをもつことから当然のこととして，その時代的制約がそれぞれの思想形成との関連で強調されていた。

まずここでは，秋水の古典の検討に先立って，レーニンの古典の方法的特質を，本稿での主題解明にあたっての必要の範囲において提示しておきたい。それは私にとってレーニンの方法的視角・理論的展開を価値基準として秋水の古典を論定するためにそうするのではなく，むしろ秋水の独自の対象への取り組みとその課題とするところの特性を明らかにしたいためである[9)]。

資本主義は，資本主義である限りそれ以外の発展の道がない必然的な発展のコースとして，独占資本主義ないしは，それを経済的本質とする帝国主義へと発展変化をとげる。それは19世紀の最後の４半世紀を転換期とし，だいたい20世紀初頭にかけての時期においてであった。このような新世界の歴史的・構造的認識は，諸帝国主義論としてまずもって，西欧を舞台として登場している。他ならない秋水の帝国主義論はそのような転換・発展の主要舞台から離れて，周縁部での舞台をながめつつ，列強のなかの自己の存在位置の，つまり日本の歴史的・構造的認識をこととしたのもであった。すでに言及したようにホブソン「帝国主義論」（1902年）に先立つ1901年に，そしてレーニンのそれに先立つところ15年も前に，つまり継承すべき知的遺産をほとんどもちえないまま，自から結晶させた作品が秋水の古典であった。いわば単騎独往の秋水であった。

レーニンが『帝国主義論』を執筆したのは第一次世界大戦の最中，彼がスイスに亡命中だった1917年１月から６月にかけての期間であった。しかし，『帝国主義論』執筆のための準備ノート（いわゆる『帝国主義論ノート』レーニン全集第39巻）をとりはじめたのはもっと早く，1915年の中頃以後である。レーニンが19世紀末から20世紀初頭にかけての時期に資本主義が新しい発展段階にはいったことによって生起していたさまざまの新しい現象に注目しだしたのは

9）トム・ケンプ著，時永淑訳『帝国主義論史』(1967年)，法政大学出版局，1971年。

本書「訳者あとがき」において時永氏は「それに関連して，帝国主義についての経済過程の側面と政治過程の側面との関連そのものを主要な論題としていることが注目される。それは，一方では，この両過程を過度に切断しようとする見解にたいする批判となって現われており，他方では，単純に経済過程的側面から帝国主義的政治権力の性格を導き出そうとする唯物史観の機械的な適用への批判となって現われている。これは，当然，帝国主義的な政治権力を，単に経済構造の分析だけから解明しえない独自性をもつものとして，問題を残すことになっているが，この本の内容自体はむしろ，従来の実に多岐にわたった帝国主義論関係の著作の検討を通じて，この点を明確に浮彫りにしている点に長所がある。これまでは‘こうした問題所在そのものさえも不明確なままにされていたと言うことができよう」(354ページ)。秋水の古典についても，こうした問題所在への検討を要するであろう。

もっと早く，1895年から96年にかけて執筆された『社会民主党綱領草案と解説』（レーニン全集，第4巻，216〜217ページ）にさかのぼる。新しい資本主義分析の理論としてこの期に登場したのが，E・ベルンシュタインをはじめ，ヒルファディング（『金融資本論』）やローザ・ルクセンブルグ（『資本蓄積論』）やカウツキー（「帝国主義」）らの資本主義の新しい事態についての独自の見解の表明であった[10]。

帝国主義的な世界戦争の危機の逼迫にたいしての，民衆の側の反応と抵抗はどんな状況であったろうか。迫りつつある大戦の危機にたいする第二インターナショナルは，1904年（アムステルダム），1907年（ストゥットガルト），1910年（コペンハーゲン）の諸総会，1912年のバーゼルの臨時総会の諸反戦決議がうちだされるが，1914年には，いわゆる「第二インターの崩壊」にいたることになる。レーニンにとって，その大戦の階級的性格をあばきだすことがきわめて緊切な課題となったのであった。

周知の「フランス語版とドイツ語版[11]」への序文のつぎの文字が示しているように，20世紀

10）トム・ケンプ前掲書　『帝国主義論』は一つの独創的な研究であるようには理解されなかった。というのは，レーニンの用いた資料も，彼の考えの一部も，もともとは他の著述家たちによるものだったからである。彼のノートブックを見れば，彼が自分にとって利用可能な関連文献のまったく完全な注意深い研究をしていたことがわかる。彼は，その出典，特にヒルファディングとホブソンとの著作には，まったく心からの感謝を捧げたのである。だが，仮りに『帝国主義論』が「独創的でない」という批判の意図が，レーニンは単に他の著述家の論点を寄せ集めただけで自分自身では少しも独自な寄与をすることがなかったという考えを示唆しているとすれば，その批判は実際には的はずれである。事実，レーニンの研究方法と目的とは，ホブソンやヒルファディングのそれとは根本的に違っている。レーニンは，違った問題を念頭において出発し，ホブソンやヒルファディングの資料を，彼が発展させつつあった理論的立場に関連させたのであって，その立場は，ずっとさかのぼって彼自身の著作の過去約4分１１世紀にわたるものであった。そうしたことを最もよく特徴づけることができるのは，彼が，マルクスの資本主義分析を，まず第一にナロードニキとの論争的諸著作のなかでロシアのその当時の発展にまで拡張し適用したということ，次に『帝国主義論』で，全世界に，特に先進資本主義諸国にまで拡張し適用したということである」(109—110ページ)

F・G・ノートヘルファー著，竹山護夫訳『幸徳秋水　日本急進主義者の肖像』福村出版，1980年ではホブスンの帝国主義論と秋水のそれとの共通の問題意識が指摘されている。「幸徳は翻訳係の時代以来，疑いなく *Contemporary Revierw* 誌には親昵していたはずであるから，そこに載ったホブスンの記事のどれかにお目にかかっているということはあり得ることなのだが，著作の中にはホブスンの記事に言及したものはない。しかしながら，両者の間には，指摘するに値する共通点が存在している。たしかにホブスンの分析の重要な部分は，海外での有利な投資の機会をうかがう金融資本を対象とした経済理論に集中しており，この理論は資本の乏しい日本に適用できるものとは言い難い。それゆえ，日本における帝国主義批判者にはあまり訴えることを期待できないものであったかもしれない。しかし，経済上の議論はホブスンの批判の一面を形作るものでしかない。ホブスンは，ますます積極的になったナショナリズムと海外への膨張との関係，そしてそのようなナショナリズムが国内の自由主義的改革に及ぼす意味においても帝国主義に関心をもっていた。ここにホブスンと幸徳は問題意識を共通にしている」(158ページ)。

11）レーニン著，大崎平八郎訳『帝国主義論』角川文庫版，1963年。11ページ

初頭，すなわち最初の帝国主義的世界戦争の前夜の「資本主義的世界経済の概観図が，その国際的相互関係においてどのようなものであったか」に『帝国主義論』の主要な任務があった。そこではまず，帝国主義の「五つの基本的標識」の内的関連をあきらかにしつつ，帝国主義の経済的基礎構造が解明，総括された。さらにレーニンは帝国主義の基礎構造の理論的総括からみちびかれる，帝国主義の資本主義一般にたいする歴史的地位の規定を下している。それは第一に，独占資本主義であること，第二に，寄生的な，腐朽しつつある資本主義であること，第三に，死滅しつつある資本主義であるという規定であった。

また第一の規定は，帝国主義の「経済的本質」であり，その「もっとも深い経済基礎」である独占資本主義という規定である。帝国主義の歴史的地位はすでにこのことによって決定的に規定づけられている。この独占はまた独占一般ではなく資本主義的独占なのである。すなわち「資本主義のなかから成長してきて，資本主義，商品生産，競争という一般的環境のうちにあり，そしてこの一般的環境とのたえまない，解決しがたい矛盾のうちにある独占」（大崎訳，前出，139ページ）なのであり，これは「完全な自由競争から完全な社会化へうつる過渡」的性格を示しているものなのであった。独占資本主義は，「完全な社会化」，社会主義への「過渡」的段階に到達した資本主義の「最高の段階」という歴史的地位にあるものであった。

「資本主義のなかから成長してきて」，資本主義の「一般的環境」のうちにある帝国主義なのである。秋水の帝国主義はこうした歴史的資産を欠く「環境」のものであり，理論的資産として継承関係にある『資本論』体系を前提とするものでもなかった。

第二に，資本主義的独占の以上のような本質から必然的に生まれるのは，「寄生的な，腐朽しつつある資本主義」という歴史的地位の規定である。独占に不可避的に随伴するこの寄生性と腐朽化の傾向は，独占の原理が生産の基礎から世界経済全般にまでおよぶことに対応してさまざまの形をとっている。(1) 独占価格の設定による技術的進歩の人為的阻止の経済的可能性，(2) 植民地の独占的領有にもとづく寄生性と腐朽化，(3) 金融寡頭制の支配にともなう「金利生活者層」の増大，(4) 資本輸出の結果，「金利生活者層」を生産から完全に離別させ，また海外のいくつかの国々や植民地の労働を搾取することによって生活している「国全体」に，寄生性という刻印をおす，(5) そして世界分割の状況における寄生性の形態は「世界のひとにぎりの高利貸国家と圧倒的に多数の債務者国家との分裂」となって発現しているのである。(6) その他，金利生活者国家のあらゆる社会政治的諸条件に影響をおよぼすが，(7)特殊的には労働運動における二つの基本的な潮流となってあらわれる。独占的高利潤の獲得は，その一部を資金として，プロレタリアートの上層を買収する（労働貴族層の形成）経済的可能性をつくりだす。寄生性は，労働運動における「日和見主義」の潮流発生の根拠となる。だから，「帝国主義との闘争は，それが日和見主義にたいする闘争と不可分に結合されている」ことが帝国主義段階での労働運動の重要な課題となっている。

労働運動における「二つの基本的な潮流」，労働貴族層の形成や日和見主義を発生させるよ

うな根拠どころか，労働運動自体の展開を欠く，日本的状況が秋水の眼前にあった歴史的現実であった。

さて，以上のような寄生性と腐朽化の諸形態は，独占の本質的側面をあらわすものであり独占の原理から発現する形態にほかならないが，同時に独占は競争を排除せず，それとの不断の対立，矛盾のなかにあって，「発展」いや「急速な発展」さえ排除しないのである。「この腐朽化への傾向が資本主義の急速な成長を排除すると考えたら，誤りであろう。いや個々の産業部門，ブルジョアジーの個々の層，個々の国は，帝国主義の時代には，程度の差はあるにしても，これらの傾向のうち，あるときは一方を，あるときは他方をあらわしている。しかも資本主義は，全体として，以前とは比較にならぬほど急速に発展するのである」(大崎訳，前出，174ページ)。つまり「発展」も「腐朽」もけっして一本調子にその傾向を続けていくのではなくして，両傾向は，部門別，企業別，国別に，そして時期的配分・交替運動をつうじて発現するのである。このような運動全体が発展の不均等性を強め，帝国主義戦争を惹起させる一つの基礎をなすのである。

また寄生性も一本調子に強固な方向にあるのではなく，不安定な要素をも含んでいる。かつての19世紀イギリスの絶対的な寄生性（広大な植民地領有と世界市場における独占的地位を基礎とする）とは異なって，帝国主義段階での寄生性の基礎はきわめて不安定的なものとなっているのである。「イギリスの全一的な独占にかわって，少数の帝国主義列強のあいだで独占に参加するための闘争がおこなわれているが，この闘争は20世紀の初頭全体を特徴づけるものである」(大崎訳，前出，152ページ)。イギリスの全一的な独占にかわって帝国主義列強の支配，世界の多数国支配が成立する。寄生性もイギリス一国に生じているのとはちがい，帝国主義世界全般をおおう。同時に多数国支配の成立は，帝国主義世界内部の「闘争」を激化させ，進出・勝利と後退・敗北の対極的関係を不断に動揺させつつあり，寄生性の政治的経済的基礎を不安定にさせる。秋水が『自由新聞』，『中央新聞』そして『万朝報』などにおいて記者，論説委員としてロイター通信や外国の新聞諸雑誌に接して知りえた「諸列強」の実相を，根底で規定するものこそ上述のものであった。

秋水の古典のなかでの現状認識は，巨細にわたり当時の国際的環境をとらえ，その問題性を鋭く摘出しているが，それはいわば国際問題担当記者とも言うべき考察で，レーニンの古典にあるような，社会発展の法則的理解，世界の動向を根底において規定する法則的把握にかんする文言はみいだしがたい。それは，ややあって上梓される『社会主義神髄』をまたねばならなかったが。ここでは法則の貫徹・作用とその発現形態との諸関係として把握するレーニンの方法を，不均等発展の法則にそくしてみておきたい。

レーニンは1915年，論文「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」のなかで，「経済的および政治的発展の不均等性は資本主義の無条件的な法則である。」(レーニン全集，第21巻，大月書店，352ページ）と述べ，また1916年の論文「プロレタリア革命の軍事綱領」のなかでは，

「資本主義の発展は，それぞれの国できわめて不均等におこなわれる。商品生産のもとでは，それ以外ではありえないのである」（レーニン全集，第23巻，大月書店，82ページ）と述べている。不均等発展の法則は「資本主義の無条件的法則」であり，商品生産のもとではこれ以外にありえない発展の在り方を規定する法則であった[12)]。

不均等発展の法則が「資本主義の無条件的法則」であるかぎり，独占以前の資本主義においても貫徹する。資本主義的生産は，無制限的拡張を特徴とし，しかもたえざる拡張は無政府的，不均等的におこなわざるをえない。資本主義的生産の発展はそれ以外の発展コースをとりえないのである。それは資本主義の基本的矛盾（生産の社会的性格と取得の私的性格との矛盾）の不可避的な運動形態にほかならない。

資本主義のもとでの経済的ならびに政治的発展における不均等発展の法則は，帝国主義の時代においては，いっそう強力に，かつ鋭く作用する。帝国主義段階での不均等発展の法則が，強力かつ鋭く作用することになるのは，基本的に，つぎの二つの条件に依拠している。一つは「独占」の成立であり，そして一つはそれを基礎とする「世界の分割」の完了，であった。

まず「独占」の成立・支配が，不均等発展の法則の作用をどのように強めているだろうか，を検討しよう。独占段階での「個々の経営」における不均等発展は，自由競争が生産の集積を生みだし，そしてこの集積が一定の発展段階に達すると独占に導く，というこの過程そのものに内包されている。「集積はますます進展している。個々の経営がたえず大きくなる。同一産業部門または異種の産業部門の経営はますます寄り集って巨大企業」をつくっていく。これら

12）独占段階以前の不均等発展は一般的にどのような形態をとっているだろうか。それを簡潔に提示するなら，まず諸産業部門間の発展の不均等として現われる。社会の各産業は，商品の販売市場として，また生産手段および消費資料の供給者として相互に役立ちあうものであるが，生産の無政府性のために，ある産業は他の産業を追い越して発展する。さらにまた，資本主義のもとでは，農業の発展が，土地所有およびその他の封建的生産関係の残存物によって妨げられているし，工業においても，小生産がたえず再生産されている。そして，労働者，小農民の消費は，つねに最低限におしさげられている。他方では，自然科学の進歩，生産技術の改良がたえまなくおこなわれ，それが大工業に，そのなかでもとくに新しい産業分野に急速にとりいれられていく。また生産手段の発達，資本の有機的構成の高度化は生産的消費から，生産手段部門の生産を消費資料部門から，相対的に独立せしめることになり，生産手段部門を中心として，生産のための生産，生産の無制限的拡張の傾向をつくりだす。それらの結果として，農業と工業，原料生産と加工工業，古い産業と新しい産業，消費力と生産力，消費資料産業と生産手段産業などの不均等発展が進行する。

また発展の不均等性のもっとも基本的な経済的根拠を，経済的要因によっても，経済外の要因によっても決定されるところの資本蓄積のテンポの相違に求めることができよう。剰余価値率，資本の回転速度，資本の有機的構成における差異などは個別資本の相異なった利潤率となって現われるが，この利潤率の差異が資本蓄積のテンポの差異を決定する純経済的な基本要件であり，結局，不均等的発展をつくりだす根拠をなすものである。資本蓄積のテンポを決定するところの経済的要因，そして経済外的要因を総合的に考察することによってのみ，資本主義の発展の不均等性の原因を明確にすることができるのである。

の企業の規模は大きく，巨額の所得を保障し，企業の技術水準は高く，非常に大きな技術＝生産単位を形成する。しかし，このことは他方で，小資本の駆逐，破壊，吸収の激しい展開の過程なのであり，また集積の結果，一企業あたりは支出されなければならない資本額は巨大となり，新企業の出現は困難化する。このような独占段階での大企業と小企業との間の不均等発展は強く，かつ鋭い。なぜなら，「われわれが見るのは，もはや小企業と大企業とのあいだの，また技術的におくれた企業と技術的にすすんだ企業とのあいだの競争戦ではない。われわれがここで見るのは，独占体とその圧迫や専横に服従しない者が，独占者によって絞め殺されるという事実」(大崎訳，前出，38ページ）の進行過程をとるからである。

一般に独占段階における諸企業，諸産業部門での資本蓄積の過程は，「飛躍」の直線的継続を意味しない。むしろ独占段階での不均等発展の法則の尖鋭的な貫徹は，資本蓄積過程をして，たえまない「飛躍」と「停滞」の交替運動の形態をとらしめるのである。帝国主義のもっとも深い経済的基礎は独占であり，その独占はまさに「資本主義的独占」である限り，「競争」を完全に，長期にわたって排除することはけっしてできない。「競争」とのたえまない，解決しがたい矛盾のうちにある「独占」なのである。独占段階の資本蓄積過程，生産力の発展過程においては，「もちろん，技術的改善をとりいれることによって，生産費を引き下げ利潤を高める可能性があるため，変化が促されはする。しかし独占に固有な停滞と腐朽化への傾向もまた作用しつづけて，個々の産業部門や個々の国で一定期間優位を占める」(大崎訳，前出，140ページ）のであり，みられるように，「飛躍」と「停滞」の二つの傾向が絡みあってすすみ，その両傾向は，産業部門別，国別，期間別に配分され，交替運動をくり返すのである。

つぎに，工業と農業のあいだの不均等発展は，資本主義一般のもとでの農・工競争の不均等発展にくらべ，どのように強力に，鋭く貫徹するものなのか。その場合の工・農の関係は，「カルテル化」され「特権的地位」にある独占的工業と，計画のますます欠如する「その他の産業部門」の一つとしての農業が対置されているのである。ここに独占の支配によって鋭さをました工・農の不均等発展の独占段階的性格が明瞭である。また工・農の不均等発展の帝国主義段階での激化が，巨額の「資本過剰」をうみだす一根拠とされ，さらに「資本にとって（農業が未発達で大衆が窮之していることのために）『有利な』投資場所がたりない」(大崎訳，前出，88ページ）という状況をつくることによって，工・農の不均等発展は独占段階に典型的な資本輸出の，内的必然性を根拠づけるものの一つとなっている。

レーニンが帝国主義の五つの基本標識の最後にあげたもの，「世界分割」の完了，というこの歴史的条件は，不均等発展の法則の作用を強め，決定的なものとする。「世界分割」の完了とは「資本主義諸国の植民政策がわが地球上の未占拠の土地の占有を完了した，という意味である」そして換言すれば，世界市場の外延的発展の終了であり，新市場発見の，したがってまた世界市場の急激な膨脹可能性の終熄であった。かつての19世紀的世界市場において外延的発展の可能性は，国と国とのあいだにたえず発生する国際的競争と不均等発展を，結果として，

拡大された規模での新しい均衡へと吸収する条件となりえてきた。20世紀的世界市場はのこ点で決定的に異なった「世界分割」の完了をその歴史的条件としているのである。

それでは，帝国主義段階における不均等発展の法則の基本的諸要素はどういう点にあるのだろうか。

第一に，「飛躍的」発展——の国別，時期別配分，交替運動を含みつつ——が，この法則のいわばプラス極に立つ国々にもたらされることである。この発展の「飛躍」性の根拠は，ある帝国主義グループがもっとも急速に技術を発展させ，商品を安くし，他の帝国主義グループを犠牲にして市場を奪取するという可能性によって規定される。むしろこの場合，他の国々よりも遅れて資本主義的発展の道にのりだした国々こそ，既得の技術上の進歩の成果を全面的に利用することができ，「飛躍」的発展をとげる。それとは逆に，先行する独占資本主義諸国では，独占に固有の「停滞」性も先行する。

第二に，不均等発展の法則の貫徹は，すでに分割されつくした世界の「周期的」な「再分割」を惹起させるところにその帝国主義的性格がある。もはやそこでは，不均等発展の結果としての急激な膨脹と新旧の交替は，絶対的な国際関係を拡大再生産させつつ進行するほかはないのである。一方の進出・勝利は他方の後退・敗北を直接的に結果させるほかはないところに，「分割」の完了→「再分割」の時代の不均等発展の法則の発現形態があるのである。

第三に，このような不均発展の法則の貫徹は「帝国主義の陣営内の不和が深化し激化する」ことになり，かくしてその「再分割」の「方法」としては，「軍事的衝突」，「軍事的破局」の方法，つまり世界再分割のための闘争，帝国主義戦争へと不可避的に帰結させるのである。

第四に，このような一方の進出・勝利と他方の後退・敗北の対極的世界構造——帝国主義戦争を頂点とする——のたえざる動揺のなかで「世界資本主義の戦線が弱化すること，この戦線が個々のプロレタリアートによって粉砕される可能性があること」，ここに不均等発展の法則がもたらす実践的帰結としての一国社会主義勝利の可能性が結論されていたのである。

さらに，独占は資本主義の階級的民族的諸関係に新たな対立をもちこむことによって，社会主義への主体的・実践的条件を準備するのである。その新たな帝国主義的対立とは，労資間の矛盾，帝国主義諸国間の矛盾，帝国主義国と植民地・従属国との間の矛盾，の三大矛盾として総括され，これの現実的展開における結節点をなすものこそ，世界戦争なのであった[13]。

さてこの節では，レーニン『帝国主義論』の理論的性格および実践的課題についてみてきたが，秋水の古典との比較，基本的差異について簡単に提示しておきたい。まずレーニンの古典はこの節の題目にもかかげたように「資本主義分析の理論」であった。帝国主義の経済的内容，つまり資本主義そのものの世紀末から20世紀初頭にかけての変化発展をとらえたものであった。

13）この節における帝国主義の基本構造および不均等発展の法則についての叙述は，久保田順著『世界経済の戦後構造』，新評論，1987年。大崎平八郎・久保田順共著『世界経済論—体制的危機の展開過程』，青木書店，1970年による。

経済学理論の系譜からすれば『資本論』による資本主義の基本規定があり，いわばそれを遺産として，継承発展関係[14]にあるものがレーニン『帝国主義論』であった。秋水に継承すべき，「資本主義分析の理論」はもとよりなく，目前にし手中にしていたものは明治30年代初頭の国内的・国際的な時代像だけであった。

上にのべたことと関連するところとなるのは無論であるが，秋水批判の論調にしばしばみられる「レーニンの方法と違う」といった指摘について，ここではレーニンの「方法」を端的に表現する例証として不均等発展の法則をとりあげてのべてきた。「方法」に全面的な考究を加えたものに古田秋太郎氏の論稿「『帝国主義論』の弁証法―世界経済把握の基本的視角―[15]」があるが，その論稿においても法則的把握とその法則の発現形態との相互関係を解きあかすにあたって不均等発展の法則は方法上の重要な位置をあたえられている。「この帝国主義戦争勃発の不可避性の論証に際して，資本主義の不均等発展の法則が極めて重要な意義をもっていることが明らかである。この法則は，商品生産の基礎上での一般法則として生みだされるばかりでなく，独占の形成，支配下に，独占と競争の矛盾の展開によって，一層激しくかつ強力な法則として貫くものとなる」。みられるように「論証」は法則的把握によって確実なものとなるのであった。

私は秋水の古典が経済問題への言及にとどまって資本主義分析の理論でなかったことを当然のことと理解しつつ，同時に列強の帝国主義的展開，そして帝国主義の「生活条件」（レーニン）としての軍国主義の必然性を法則的に把握しようとしていた営為，政治的「論証」を評価したい。

3.　日本資本主義形成期の時代的制約

すでに今日までに，幸徳秋水のこの古典がもつ思想上の意義については，諸先学の業績によって様ざまな角度から位置づけられてきた。ここではそのうちから特徴的な三論稿をとりあげ，私の問題関心・国際平和論の日本的祖型としてこの古典を位置づけるためのよすがとしたい。

その一つは『幸徳秋水全集』第三巻に収録されている大河内一男氏の解説「反戦の書『廿世紀之怪物帝国主義』[16]」である。そこではまず冒頭に，「わが国の社会主義運動をつらぬく金線がその反戦闘争にあることは言うまでもないが，それのもっとも率直端的な実践が，日露開戦直前の時期からはじまり日露戦争中を通して刊行され続けた『週刊平民新聞』を中心とする「非戦論」の主張と運動であったことは，誰もが知っている。もともと日本のごとく，その資本主義としての発展が戦争を足場としながら遂行されてきたような社会では，社会主義運動が，

14）久保田順「経済学における論理と歴史―『資本論』から『帝国主義論』への発展関係の方法的考察―」（上）（下）『経済系』第30集，第31集，1956年。

15）古田秋太郎「『帝国主義論』の弁証法―世界経済把握の基本的視角」（上）（中）（下）『中京商学論叢』第29巻，3号，4号，第30巻1号，1982―1983年。

16）幸徳秋水全集編集委員会編『幸徳秋水全集』全12巻，明治文献，1968―1973年。第3巻における解説。

反戦運動を中心にしながら展開されなければならなかったことは言うまでもあるまい」とされて，運動を貫ぬく「金線」を「反戦闘争」に求められている。日本資本主義は一つの戦争から次の戦争へと，自分の存立を賭けながら膨張をつづけてきたのであるから，社会主義的な啓蒙や実践も，そうした「日本資本主義に固有な条件」に即して展開しなければならなかったのは当然であるとされている。つまり戦争→膨張→反戦といったチャンネルこそ運動の日本型を形成する環のひとつであった。氏はまた，「戦前の日本を通じて，日露戦争中における社会主義こそが，反戦運動として最も鮮明卒直であり，大胆不屈であったと言わなければなるまい。そしてその中心的存在が幸徳秋水であった」と位置づけられている。

さらに「第一次世界大戦，満州事変，日華事変，太平洋戦争の時期における日本の社会主義が，どれだけ真剣に反戦運動を展開しようとしていたかを回想してみるとき，日露戦争のさなかに，『週刊平民新聞』に拠りながら，節をまげず，反戦の主張をくり返し，発禁，罰金，投獄の反復の末，満身創痍，刀折れ矢つきて，六十四号の赤刷号をもって廃刊されるまで，その主張において妥協せずその論調において骨を刺すがごときものであった」ことは，今から想ってまことに驚嘆に値する信念と勇気とであったと秋水の思想と行動を高く評価され，反戦運動の「中心的存在」としての秋水の，その運動の時期的ピークを，日露戦争さなかの，『週刊平民新聞』刊行期におかれている。『週刊平民新聞』の創刊は明治36年11月15日であり，秋水の古典はそれに先立つこと2年半の明治34年4月（1901年）の発刊であった[17]。『廿世紀之怪物帝国主義』は，まさに幸徳にとって，「後の彼の反戦闘争のための前哨戦であった」。

たしかにこの古典は，秋水のその後の思想的発展・運動の展開・変遷の径路における中途の，しかし不可欠の一里塚であった。大河内氏がいわれるように「前哨戦」であり，ついには大逆事件にいたる苦難の全面戦争への端緒であった。彼の体制認識も，ややあっての『社会主義神髄』の刊行（1903年）によってうかがえるような理論的深化への戸口に立脚していたのである。

秋水の古典が「特異な価値をもっている」点は，なによりも本書出版の時期の，明治の時代的情況にてらして，強調されている。「わが国における社会主義思想は，次第に定着に向いつつあったが，19世紀後半期における先進資本主義国が演じていた激しい対外進出政策，それと結びついた戦争の危機については，まだどの社会主義者も充分な認識をもっていたとは言えなかった。明治27，28年の日清戦争における勝利，その後の産業の発展と対外的地位の上昇といふ事実，そして明治32年の条約改正」「条約改正と結びついていた外資導入と『内地雑居』に対する不安と不信，その半面である排外思想の存在，これらの事情は，日本の社会主義運動をして，鮮明な反戦運動として展開せしめるには甚だ不適当な情況」のさなかでの，この古典の上

17）その前年の11月からこの年の2月にかけて，『千代田毎夕新聞』に発表された「大逆無道録」・「刀尋段段録」・「帝国主義」の諸論稿もとにして補筆されたものであり，この古典の「第2章愛国心を論ず」は「大逆無道録」にあたり，「第3章軍国主義を論ず」は「刀尋段段録」にあたり，「第4章帝国主義を論ず」は「帝国主義」にあたる。

梓であった。

秋水の古典がホブスンのそれに先立って刊行されている点はおおいに注目されていいが，それなりの「時代的制約」をもっていた点も見のがすことができないとして，氏はつぎの二点をあげられている。

第一は，秋水の帝国主義論が「軍国主義と愛国心を二つの軸として考えられており，資本主義の独占集中への傾向，それと結びついた対外政策としての帝国主義ではなく，つまり『資本主義の最新の段階』としての帝国主義ではなく，愛国心と軍事的エキスパンションのあるところ，そこに帝国主義があった。近代資本主義の発展の特定の段階としての帝国主義の理解までには幸徳はまだ距離があった。従ってこの『廿世紀之怪物』は一挙にたたき潰さなければいけなかった」のであり，そしてそのための主体的要素，担い手としての，労働者の広汎な闘争組織に対して充分な信頼をおこうとせず，秋水にあっては，意識の高い少数の，「世界人類の平和を愛し，幸福を重んじ，進歩を希ふの志士仁人」によって担当されなければいけなかったと。「此処にこの小さな先駆的著作にとっての制約がかくされていた。総じて幸徳のように，自由民権論から出発して労働問題に接近した著作家の場合には，問題の解決をつねに上からの革命に期待しようとする傾向を共通にしていた点を銘記されていい」と氏はのべられている。

まさに「志士仁人」による「上からの革命」，これが幸徳秋水の，「時代的制約」にかたく規定されている行動展開のパターンであった。

第二にこの古典について，大河内氏は「帝国主義一般を論評したものであるが，同時に日本の帝国主義の後進性について述べている点は指摘しておく必要がある」とされ，秋水が，「第四章　帝国主義を論ず」でのべているつぎの文章が引用されている。「我日本は武力を有せり。以て国旗を海外に建つるを得べし，而も我国民は此国旗の下に投下すべき幾何の資本を有せりや，此市場に出すべき幾何の商品を製造するを得るや。領土一たび拡張す，武人は益す跋扈せん，政費は益す増加せん，資本は益す欠乏し生産は益す萎靡すべし。我日本にして帝国主義を持して進まん乎，其結果や唯だ如此くならんのみ。欧米諸国の帝国主義者は，口を資本の饒多と生産の過剰に藉くも，日本の経済事情は全く之と相反す。欧米諸国が大帝国の建設は，其腐敗と零落に向って進むや論なしと雖も，而も猶ほ或は若干年間，其国旗の虚栄を誇ることを得べし，我日本に至つては其建設せる帝国を豈に能く一日だも維持することを得んや。而も漫に多数の軍隊と戦艦とを擁して呼で曰く，帝国主義なる哉と。我日本帝国主義者の愚や，真に及ぶ可らず」と。みられるように秋水は，まさに，日本帝国主義が「武力を有せり」しかしながら一方「幾何の資本を有せりや」「出すべき幾何の商品を製造するを得るや」と問い，端的に日本帝国主義と欧米のそれとの違いをえがいている。大河内氏は「日本の『軍人的帝国主義』を批判している点は注意されていいが，こうした比較は，ほんらいもっとそれぞれの資本主義の成立と発展との条件に即して検討されるべきことで，単に軍人または軍事力が前面に位置しているような帝国主義であるかどうかの問題ではないと思ふ」と評されている。たしかに氏の

評言にあるように「ほんらい」の検討にあたっては，その通りであろう。にもかかわらず秋水の古典が，「それぞれの資本主義の成立と発展との条件に即して」などといったことなく，あるいは出来ないままに，帝国主義の日本型を「軍人的帝国主義」と規定しいることの緊切な実践的な意味と思想的意義はどこにあるのだろうか。いわば資本主義的分析の理論ならざる秋水の政治状況の分析のなかから私たちはなにを看取すべきであろうか。秋水が「時代的制約」のただ中で，語ろうとしたものの今日的意義こそ，いま検出を要するものであろう。その点まずは，他の論稿への考究をつづけながら解きあかしてみたい。

4．帝国主義認識の形成過程

秋水の古典にたいする批判的論評のほぼ定型といっていいものは，井口和起氏も指摘されているように，「マルクスやレーニンの理論を基礎に発展した今日の帝国主義把握の尺度をもってこれをはかることに中心がおかれているように思われる[18]」ものであった。井口氏は，しかしながらこのやり方だけでは，秋水がどのようにして，しかもほかならぬ「愛国心」と「軍国主義」を論ずることによって，「帝国主義」への批判を展開しようとしたのかを，幸徳秋水の「思想の形成に則して」明らかにすることには，必ずしもなりえていないのではなかろうかとされ，ホブソンもましてレーニンもないままに，自ら軍国主義への批判を形成していった秋水の思想の歩みを明らかにすることが，今日またきわめて重要な課題であるとされ，「思想の形成に則して」，まず最初にこの古典を書くにいたる直前における――井口氏によって「彼の主張は帝国主義者のあせりと基本的に異ならない」と把握されている世紀末から，わずか2年足らずうちに帝国主義批判の立場を明瞭にするまでの，秋水の思想的推移と到達点を解明しようとされる。それは『万朝報』における秋水の，1900年義和団事件にかんする論説の数々を詳細に検討することによって果されている。

秋水の筆になる義和団事件への論評は1900年6月16日付の「列国協同」からはじまるが，井口氏が列挙されている26論説のうち，論説の大意を略記されているところの幾つかを以下にかかげてみよう。

「6・16　列国協同」　義和団鎮圧は必ずしも困難なことではないが，「列国争衝の間に立って我国権を維持し我国利を増進して，以て東洋平和の担保者たる天職を全くするの難き」ことが問題であり，「清国問題」とはすなわち「列国問題」である。そしてその列国の協同というのはその実「協同必ずしも協同ならず，聯合ならず，要は機に臨み変に応じて自家の利益と権勢を増進するに在り，今や時局の変化，翻雲渓雨旦夕を計らざるの形勢に処して，切に外交当局の決意と準備を望まずんばあらず」

「6・22　対清運動」義和団鎮圧後こそ清国処分問題，列国争衝の問題を表面化する時であ

18）井口和起「幸徳秋水『廿世紀之怪物帝国主義』について」京都大学『人文学報』第27号，1968年。

る。「此時に於てや元より当局，外交の手腕如何に存すと雖も，其背後の実力と，今日平和恢復の際に占取せる地歩の如何が，非常の関係を有せずんバあらず。故に将来完全なる国権利益を扶持せんと欲せバ，列国と協同一致の運動を為すに際して自国の地歩を確保するに於て，決して一歩を後るるを許さず，是れ当局の極めて戒心せざる可らざる所也」

「7・29　日本の態度方針」善後処理について日本のとるべき方針への注文。(1)　列国の過大要求に対し率先して清国の利益を守ること。(2)　列国の勢力均衡を守ること。　(3)　(1)(2)の目的のために一方で清国に対する顧問として，他方で列国と清国の調停者としてふるまえ。(4)この正義のためには列国との戦争をも辞さない大勇気をもて，「蓋し今日に於て，東洋の平和文明の為めに，清国の利益を擁護し，列国均勢の破壊を防禦して，而して清国対列国間の調停者として円満なる効果を奏するの資格を有するに列国中我が日本に若くハなし」

これらの中国義和団運動にたいする秋水の認識・主張について井口氏は「日本帝国主義者たちの主張と基本的に変るところがない。これがこの時期の秋水の外交問題を論ずる時の全体の基調である」とされている。そうした時期，日本は列強による義和団運動弾圧の主役をつとめていたのであるが，中国への本格的な帝国主義支配はまさにこの義和団運動の敗退とともに開始されていく。

1900年のこの時点で，この義和団運動を「中国戦争」という表現で考究しているレーニンはこれをどのように認識していたであろうか。まさに同時代人としての秋水との，この時期での認識の差異を記しておきたい。

帝国主義の世界史的起源は，戦争と固く結ばれてレーニンによって語られる。「アメリカとヨーロッパにおける，ついでまたアジアにおける資本主義の最高の段階としての帝国主義は，1989〜1914年ごろまでに完全に形づくられた。スペイン＝アメリカ戦争(1898年)，イギリス＝ボーア戦争(1899年)，日露戦争(1904〜1905年)，1900年のヨーロッパの経済恐慌——これらが世界史の新しい時代の主要な歴史的道標である[19]」この一文に先立つこと16年も前に，若きレーニンは『中国戦争[20]』1900年12月において新しい世界史的段階における戦争と平和について基本的見地をすでに提出していたといってよい。

20世紀がはじまった年，帝国主義的国際環境のなかで残された世界分割の対象たる中国に，帝国主義の圧力が集中された。反帝国主義への中国民衆の動きには広範なものがあった。孫文の指導による恵州事件は反封建主義の運動と規定されるものであったが，反帝国主義としての抵抗運動は，義和団運動として強烈な展開をみせた。

華北を中心に広がりつつあった義和団は，まずドイツの膠州湾占領にともなう掠奪の直接の被害をうけた山東からはじまり，外国資本による鉄道の敷設されていた天津，北京，保定間に

19）レーニン『帝国主義と社会主義の分裂』(1916年)，全集第23巻，大月書店，112—113ページ。

20）レーニン『中国戦争』（1900年）全集第4巻，大月書店。

拡大し，鉄道と租界とが破壊の対象となった。列強8カ国の武力干渉が開始されるのであるが，イギリスはボーア戦争のために，アメリカはフィリピンにおけるアギナルドの独立運動の抑圧のために，それぞれ兵力を釘付にされていたので，主力は日本軍が，ついでロシア軍が重要な役割をにないつつ，8カ国の連合軍によって北京が占領され，1901年の北京議定書の成立によって，鎮圧，結末をむかえたのであった。

論文『中国戦争』では，「ロシアは中国との戦争を終わろうとしている」という書き出しで始まるように，新聞『イスクラの』第一号の発刊は1900年12月の時点であった。『中国戦争』で解明されようとした問題は，きわめて明確であった。社会主義者は，この戦争にたいしてどういう態度をとらなければならないか，この戦争はだれの利益のために行われているのか，ロシア政府がとっている政策のほんとうの意味はどこにあるのか，を問うものであった。

「まず第一に，われわれの政府は，中国と戦争などやっていないとさえいいはっている。政府はただ反乱を鎮圧し，暴徒を鎮定し，中国の適法の政府が法秩序を回復するのをたすけているだけだ，というのである。宣戦布告はなかった。だが，そのために問題の核心はすこしもかわらない。なぜなら戦争はどのみち行われているからである。では，ヨーロッパ人にたいする中国人の襲撃，イギリス人，フランス人，ドイツ人，ロシア人，日本人，その他がこのように夢中になって鎮定しているこの暴動は，なにからおこったのか？　『白色人種にたいする黄色人種の敵意』，『ヨーロッパの文化と文明にたいする中国人の憎悪』からおこったのだ，と主戦論者どもはいいはっている。そのとおり，中国人は実際ヨーロッパ人をにくんでいる。だが彼らはいったいどんなヨーロッパ人を，そしてなんのことでにくんでいるのか？　中国人は，ヨーロッパ諸国の人民――彼らとのあいだには中国人はなんの衝突もなかった――をにくんでいるのではなく，ヨーロッパの資本家と，その資本家のいうとおりになっているヨーロッパの政府とをにくんでいるのである。ただ金もうけのためだけに中国にやってきて，そのご自漫の文明を欺瞞と略奪と暴行のためだけに利用し，人民を麻酔させるアヘンを商う権利を得るために中国と戦争を行い（1856年におけるイギリスおよびフランスと中国との戦争），偽善的にもキリスト教を弘布することで略奪政策をおおいかくしてきた人々，このような人々を中国人がにくまずにいられるだろうか？　ヨーロッパのブルジョア諸政府は，ずっと以前から中国にたいしてこのような略奪戦争を行っているが，いまそれにロシアの専制政府もくわわったのである。この略奪政策は，ふつう植民政策と呼ばれている。資本主義的工業が急速に発達しつつあるどの国も，植民地を，すなわち，工業の発達が微弱で，多かれすくなかれ家父長制的な生活様式を特徴としており，工業製品を売りこんでいい金もうけができるような国々を，じきにさがしもとめるようになる。そして，ひとにぎりの資本家の金もうけのために，ブルジョア諸政府は，数かぎりない戦争を行い，不健康な熱帯の国々で幾連隊もの兵士を死なせ，人民から取りたてた幾百万もの金を投げすてて，住民を絶望的な反乱と餓死に追いやってきた[21]」そしてイギリ

21）前掲書123ページ。

スにたいするインド土民の反乱やインドの飢饉，あるいはまた，1900年のレーニンの前で，いま続けられているイギリス人とボーア人との戦争[22]をおもいだしてみたまえ，と例証を差し示す。

そこで，いまやヨーロッパの資本家は中国にその貪欲な爪をのばしてきた。ロシア政府も，ほとんどまっさきに爪をのばした組であった。レーニンはロシア政府が中国においてこのような政策を遂行しているのは，いったいなんによるのだろうか？　いったいこの政策はだれにとって有利なのか？　と問い，資本家と役人の基本的立場を具体的に指摘する。「それは，中国と商業を営むひとにぎりの資本家のお歴々にとって，アジアの市場を目あてに商品を生産するひとにぎりの工場主にとって」，そして「緊急軍需注文でいまあぶく銭をもうけているひとにぎりの請負業者にとって」有利なのである。さらにこのような政策は，文武の高い官職を占めるひとにぎりの貴族にとって有利なのであった。彼らには冒険政策が必要なのである。「なぜなら，このような政策のうちでこそ，上長の気に入り，出世し，『勲功』で身をかざることができるからである。わが国の政府は，このひとにぎりの資本家と悪がしこい役人の利益に全人民の利益を犠牲に供してはばからない」

一方，中国における征服，戦争から，ロシアの労働者階級とすべての働く人民にとってどんな利益が生じるだろうか？　「働き手を戦争にとられて零落した数千の家族，国債と国費の非常な増大，増税，労働者の搾取者である資本家の権力の強化，労働者の生活状態の悪化，ますます多くの農民の斃死，――これこそ中国戦争がもたらすと予想され，またすでにもたらしつ

22）岡倉登志『ボーア戦争―金とダイヤと帝国主義』（教育社歴史新書），教育社，1980年。板垣雄三，「世界分割と植民地支配」，（『岩波講座世界歴史』22.）岩波書店1969年などが指摘しているように，戦争の基本的性格において「ボーア戦争におけるアフリカ人住民の問題は，ほとんど顧りみられずにきている。そして，そのことは，イギリス帝国主義がボーア人の二つの共和国の犠牲のうえに南アフリカ征服を実現しようと目論んだ戦争としてのみボーア戦争をみなし，その性格を一面的にしか把握できなくしている。いいかえれば，イギリスとボーアとの対立や協調などのあらゆる動きが『原住民』をいかに支配するかという問題をめぐって生じたものであり，1902年5月のブレトリア講和がボーア懐柔政策を支える『土着民』差別の体制化であり，重層的関係をもって構成された帝国主義体制の成立を意味したという重要な点を看過させる結果を生じさせる」こととなっている。（岡倉登志前掲書 19ページ）

なおまた，1903年，ロマン・ロラン（Romain Rolland）は戯曲『時は来たらん』（『信仰の悲劇』旧ロマン・ロラン全集，11）みすず書房，1959年。において，絶望的な反抗をつづける，ボーア人たちの苦しい戦いをえがきながら，イギリス軍司令官の良心のなやみ，自由にものを考える若い兵士たちがえがいている。ロランがはげしく非難し告発したのは，このような植民地支配を必然化するヨーロッパ文明全体の基盤であった。

別して私の眼をうつものは，この戯曲のなかにボーア人の戦い振りとは別に，原住民の姿が描き込まれている点であった。今日の第三世界論が，第三世界諸国の内部での下層に位置する民衆層の動向に注目しなければならないように，ロランはすでにボーア人と，更に下層にあって抑圧されている原住民層の問題にも光をあてているのであった。ここには今日の南アフリカ共和国におけるアパルトヘイト政策とそれに抵抗する人びと，といった構図が予知されているといってよい。

つある結果である」。しかし，そうした中国戦争が全人民にどれだけの負担をかけているかの正確な情報はえられないのであった（この戦争が数億ルーブルの支出を必要としていることは疑いない，としながらも）。なぜなら，ロシアの全出版物，すべての新聞雑誌は奴隷にされていて，政府の役人の許可なしにはあえてなに一つ掲載しないからであった。

戦時下のジャーナリスト達は，ここでも重要な役割を果すことになる。「政府と金袋のまえに這いつくばるジャーナリストたちは，人民のあいだに中国にたいする敵意をあおりたてようと大骨を折っている。けれども，中国の人民はいまだかつて，またどのようにしてでもロシア人民を圧迫したことはなかった。中国の人民自身が，ロシアの人民を疲弊させているのと同じ害悪のために，すなわち，飢えている農民から貢税をしぼりとり，自由へのあらゆる志向を武力で弾圧するアジア的政府のために，中華帝国にも侵透してきた資本の圧制のために，くるしんでいるのである」。ヨーロッパの文明が中国の野蛮を打ちまかしたと狂喜し，あおりたてる，政府とジャーナリズムにたいして，民族的憎悪ではなくて，民族的連帯をもよびかけるのである。中国におけるツァーリ政府の政策は，ロシアの人民を奴隷の状態にひきとめているばかりではなく，この政府はまた「自分自身の奴隷状態に反抗して立ちあがった他の民族を鎮定するために，わが国の人民をさし向けている（ロシアの軍隊がハンガリアの革命を鎮圧した1849年のときのように）」と。それゆえに，すべての自覚した労働者には，民族憎悪をあおりたて，人民の注意をその真実からそらせようとするものにたいして全力をあげて反抗する責務がかかっているとし，その手段にかんしてつぎのような結びの言葉が置かれる。「戦争が働く人民に負わせる新しいくびきからまぬがれるためには，ただ一つの手段しかない。人民代表の召集がそれである。この人民代表は，政府の専制権力にとどめをさして，宮廷の徒党だけのものでない〔全人民の〕利益を考慮するよう政府に強制するであろう。」と。（文中の〔　〕の文字は訳者の註）

義和団運動は，列強帝国主義の世界分割の完成過程における激しい反帝国主義運動であった。にもかかわらず政治支配のシステムとしての他民族支配という政治的形式を明確にもつものとしても，若きレーニンが生き，かつ批判した世界は，いまだ帝国主義の経済的要素を充分に具備するにはいたっていたわけではない。

しかし論文『中国戦争』では，ややあって確立される帝国主義世界への認識と戦争の意味を考えるための基本的視点をすでに原型として提出しているといってよい。私はここに秋水が経済的内容を充分には具備しないながらも日本帝国主義の政治的支配・進出のシステムを摘出したその古典との類似をみる。

第一に，この戦争は誰れの利益のためにおこなわれているのか，階級的性格を解明する基本的視点があり，第二に，その戦争を推進する各階層の諸経済基盤とその行動様式が具体的に明示される。第三に，戦争を遂行するための不可欠な方策，メカニズムによって，いかに人民が労苦と悲惨の中におとしめられるか。国費の浪費と人命の浪費として。第四に，ジャーナリズ

ムを中核とする勢力が，国内の主戦論，他民族蔑視のキャンペーンを，いかに権力と融合しながら展開するか。第五に，侵略されている側と民族と侵略する側の人民との，共に被害者としての連帯の形成の必要性。第六に，反戦的立場にたつて階級が「責務」として目ざすものは，自国の政府の専制権力へのとどめをさすことであった。第七に，論文『中国戦争』では，ヨーロッパ列強の連合にもとづく「分割」という視点と，それにつづく「再分割」運動の開始予兆が示されているといってよいであろう。

さてレーニンが『中国戦争』を提出して自国の専制権力を弾劾しているとき，同時代人の秋水の思想的位置は，「日本帝国主義者たちの主張と基本的に変るところがない」と同時に，井口氏も指摘されるように，『万朝報』の「8・7　非戦争主義」および「11・17　排帝国主義論」にみられる論調もまた，秋水のひとつの側面であった。前者において秋水は，「世の平和論者や非戦争主義者や，何ぞ今に於て大に起て平生の主張を呼号せざるや」と書き始め，「嗚呼彼等平和論者非戦争主義者は，何ぞ多数兵士の苦境を説かざるや……何ぞ軍人遺族の悲惨を説かざるや……何ぞ戦地人民の不幸を説かざるや……何ぞ一般社会の損害を説かざるや……」として，この四つの点から戦争の罪悪をあげ，批判し，非戦争主義の立場を鮮明にしている。

後者もこうした秋水の論調の性格を含むもので，軍国主義批判が始まった段階におけるその徹底化であり，新たな展開への芽生えをみせている論説と位置づけられるものであった。

さて上記「排帝国主義」から日ならずして上梓された秋水の古典は，どのような理論的な深化をとげ思想的な提言を含むものとして誕生し，かつ諸批評を受けることになるのだろうか。

5.　日本型帝国主義論の展開

秋水の古典における帝国主義認識はどのような基本的性格をもっていたのか，その日本的特質を刻印する思想的，歴史的要素はなんであったか。前出の井口氏の論稿では，秋水の古典で言う「帝国主義」は，「其領土の拡張」「其武力的掠奪」を意味しているのであって，軍備を持たず，武力的侵略のかたちをとらない，石炭・鉄などの豊富な資源を基礎とした資本の拡大，工業の発展そのものは，まだ「帝国主義」とは必ずしも認識されてはいないのであった。言いかえれば，秋水の批判する軍国主義にたいして，資本主義の発展の結果としての帝国主義段階における必然的産物という認識はない。従ってここに批判されるのは，イギリスのボーア戦争であり，ドイツの軍備拡張であり，アメリカのフィリピン併合である。秋水にとって批判しなければならない「帝国主義」とは軍国主義にほかならないということ，これが第一であった。

それと関連して第二に，軍国主義が資本主義の帝国主義段階における一つの必然的産物なる認識を欠く一つの結果として，軍国主義を助長し，増大させる最大の要因は他に求められた。これが秋水の「愛国心」への批判であった。

第三に，秋水による「愛国心」批判を中心とする帝国主義論の展開を批判する論調[23]にたいして井口氏は，そのような批判的指摘が容易になされるとしても，しかし重要なことは，たと

えこのようなやり方もあるにせよ，「国家」・「愛国心」の眩惑からの解放が，秋水をして新たな飛躍を準備せしめたということではなかろうかとされている。私も秋水における「愛国心」批判，そしてそれを基軸とする帝国主義批判の意義は，当時の歴史状況のなかでの民衆の意識と実状，権力による明治の体制編成の意図の方向にてらして極めて大きなものがあったと考えるのである。

周知のところであるがこの古典の第2章「愛国心を論ず」の冒頭の一文と末尾の部分をかかげておきたい。

帝国主義者の喊声

「我国民を膨脹せしめよ，我版図を拡張せよ，大帝国（グレーターエムパイヤ）を建設せよ，我国威を発揚せよ，我国旗をして光栄あらしめよ，是れ所謂帝国主義者（イムペリアリスト）の喊声也。彼等が自家の国家を愛するや深し。

英国は南阿を伐てり，米国は比律賓（ヒリピン）を討てり，独逸は膠州を取れり，露国は満洲を奪へり，仏国はフアシヨダを征せり，伊太利はアビシニアに戦へり。是れ近時の帝国主義を行ふ所以の較著（こうちよ）なる現象也。帝国主義の向ふ所，軍備，若くば軍備を後援とせる外交の之に伴はざるはなし。

愛国心を経とし軍国主義を緯とす

然り其発展の迹に見よ，帝国主義は所謂愛国心を経となし，所謂軍国主義（ミリタリズム）を緯となして，以て織り成せるの政策に非ずや。少くとも愛国心と軍国主義は，列国現時の帝国主義が通有の条件たるに非ずや。故に我は曰はんとす，帝国主義の是非と利害を断ぜんと要せば，先づ所謂愛国心と所謂軍国主義に向って，一番の撿覈（けんかく）なかる可らずと。

愛国心とは何物ぞ

然らば即ち，今の所謂愛国心，若くば愛国主義とは何物ぞ，所謂パトリオチズムとは何物ぞ。吾人は何故に我国家，若くば国土を愛する耶，愛せざる可らざる耶」

23）石母田正「幸徳秋水と中国―民族と愛国心の問題について―」『続歴史と民族の発見』東京大学出版会，1953年，所収。岩波書店版『石母田正著作集』も現在刊行中である。

上記の論稿による石母田氏の，秋水の「愛国心」のとらえ方に対する批判にかんして，まさに一面，井口氏は明確にそれに同意され，秋水の「一面性」，「弱点」，「限界」であるとしている。「なるほど石母田正氏の指摘されるとおり，秋水の『愛国心を論ず』は愛国心を尋ら排外主義の側面からとりあげ批判することにのみ，重点がおかれている。またこれを批判する仕方は，「愛国心」を「同情側隠の心」と比較してみたり，あるいは「望郷心」と同一視し，同列に論じてみたり，その結果すべて「愛国心」＝「動物的天性」として専ら唾棄すべきものとするような，論理の飛躍，混乱を伴なっている。また「愛国心」の歴史的把握，分析などとうてい行ないえず，ギリシャ，ローマの奴隷の「愛国心」も，近代イギリス，ドイツ国民の「愛国心」もすべて同列にしかも専ら排外主義としてのみ語られている。さらには天皇制に対する階級的批判よりも，むしろ国民の「愛国心」が自由と民主主義の理想の日本における発展をさまたげているというような批判まで行なっている。そしてこれらの諸点は明らかに秋水の一面性であり，弱点であり，限界であることは確かであろうし，それを指摘することは容易であろう。」（井口和起，前出論稿，145ページ）

秋水は「愛国心とは何物ぞ」と問い，第2章の末尾に結びの強烈な文章をかかげている。

「我は以上説く所に依て，所謂パトリオチズム即ち愛国主義若くば愛国心の何物たるかを，

愛国心の何物たる如此し

略ぼ解し得たりと信ず。彼は野獣的天性也，迷信也，狂熱也，虚誇也，好戦の心也，実に如此き也。

人類の進歩ある所以

言ふこと勿れ，是れ人間自然の性情にして之れ有る遂に已むを得ざる也と。思へ自然より発生し来れる諸種の弊毒を防遏するは是れ正に人類の進歩ある所以に非ずや。

「故に知れ，迷信を去て知識に就き，狂熱を去て理義に就き，虚誇を去て真実(トルース)に就き，好戦の

進歩の大道

念を去て博愛の心に就く，是れ人類進歩の大道なることを。

故に知れ，彼野獣的天性を逸脱すること能はずして，今の所謂愛国心に駆使せらるゝの国民は，其品性の汚下陋劣なる，況(ま)して高尚なる文明国民を以て称す可らざる者なることを。

故に知れ政治を以て愛国心の犠牲となし，教育を以て愛国心の犠牲となし，商工業を以て愛国心の犠牲となさんと努むる者は，是れ文明の賊，進歩の敵，而して世界人類の罪人たることを。彼等は十九世紀中葉に於て一たび奴隷の域より脱出せる多数の人類を謬妄なる愛国心の名の下に，再び奴隷の域に沈淪せしむるのみならず，更に野獣の境に迄も陥擠せんとする者なるを。

文明の正義人道

故に我は断ず，文明世界の正義人道は，決して愛国心の跋扈(ばつこ)を許す可らず，必ずや之を芟除し尽さざる可らずと。而も如何せん，此卑しむべき愛国心は，今や発して軍国主義(ミリタリズム)となり，帝国主義となって，全世界に流行するを[24]」

「愛国心を経」とし「軍国主義を緯」として構成されている秋水の帝国主義の，やはり構造的把握というべき帝国主義像は，当時の日本の民衆の意識と現状のなかの「愛国心」が体制構築のための大きな構成要素として，現実に実在していたことの反映ではなかったろうか。藤井松一氏は，秋水，内村鑑三，堺利彦らの非戦論のなかで，「民衆の素朴な愛国心」をどう把握し，どう位置づけたらいいのかを，示唆されるところの多い次の文章で註記されている。もちろん秋水の古典上梓の時と，1903年の万朝報退社時とのタイムラグは無視しえないが，下に指摘される民衆の動向は1901年次においても秋水の認識のなかにあったと考えられる。

「それは抽象的な理想論で現実政治から遊離しており，それが国民を組織できなかったのは，『日本を自主独立の強国としたいとねがう国民の素朴な愛国心』を積極的に受け止めることができず，また『ツァーリズム・ロシアの際限のない侵略主義に対抗する方途』を明らかにできなかったためであるという見解は（たとえば，藤村道生「開戦世論の構造」(『日露戦争史の研究』所収)），明治ナショナリズムがこの時期すでに国家主義・帝国主義と，平民主義・社会主義の両極に分解し去っていた歴史的事実を無視し，また『民衆の素朴な愛国心』は容易に国家

24）飛鳥井雅道編『幸徳秋水集』(近代日本思想大系，13）筑摩書房，1975年，36—37ページ。および49—50ページ。

主義的侵略主義に転化されうるものであることを認めようとしないものであろう[25]」と。まさに秋水が目前にした歴史的事実も，国家主義的侵略主義に転化されうる「愛国心」ではなかったろうか。「愛国心」批判の緊要性はその歴史的現実のなかにあったといえよう。

さて井口氏は論稿の「Ⅳ　むすび」において，1900年～1901年にかけて『廿世紀之怪物帝国主義』に集約される秋水の「帝国主義」批判について，ひとつの結論的規定を提出されている。すなわち「基本的には軍国主義批判にほかならなかったということになる「非戦論」として出発して軍国主義を批判し，その限りで帝国主義への批判を進めていくことの秋水の帝国主義批判の立場は，なお基本的には小ブルジョア民主主義者のそれであった」（力点，久保田）と。

この「むすび」における秋水への「小ブルジョア民主主義者」とする規定はどこに依拠してうちだされたものだろうか。ただちにレーニン『帝国主義論』における周知の次の(1)(2)の文章が提示される(1)「帝国主義の政治的特性は金融寡頭制の抑圧や自由競争の排除によって生ずる，あらゆる面での反動と民族的抑圧の強化とであるから，帝国主義にたいする小ブルジョア民主主義反対派が，20世紀の初めにほとんどすべての帝国主義であらわれている[26]」。ついで氏の文字が入り「彼は植民地掠奪のための戦争を『犯罪的』戦争と呼び，他国の併合を憲法違反と考え，排外主義を非難し，専制に反対する」とされ，さらにレーニンの文章(2)につながる。

(2)「しかしこの批判全体が帝国主義とトラストとの，したがって資本主義の基礎との不可分の結びつきを認めることをおそれ，大規模資本主義とその発展とが生みだした諸勢力と結合することをおそれているかぎりで，この批判は『あどけない願望』にとどまったのである[27]」

みられるように「小ブルジョア民主主義者」という秋水への規定は，上のレーニンの文章によっているわけであるが，まず(1)の文章では「金融寡頭制」の確立が国内体制としてあり，国際体制としても展開されている段階での「抑圧」に対する小ブルジョア民主主義反対派なのであり，また(2)の文章の示している歴史的現実は「トラスト」がすでに「資本主義の基礎」と，しっかりと「不可分に結び」ついて，かつその大衆状況は，「大規模資本主義とその発展とが生みだした」ところの「諸勢力」の存在が前提されているのである。そうした発展の段階にこそ広汎に出現する「小ブルジョア民主主義者」の役割なのである。秋水の古典における基本性格は「あどけない願望」どころか，まさに「志士仁人」を主体とする，つまり労働者階級の主体的基底を欠くなかでの切実な「反対派」なのであった。

秋水の古典の基本的性格の軸心に儒教倫理を位置づけて理解しようとされたのは大原慧氏の諸論稿である。「儒教倫理と『非戦論』――『廿世紀之怪物帝国主義』を中心に[28]」において氏は，秋水の古典の目的を，なによりも，藩閥専制政府による日本の外交政策を批判しようとしたものであり，とりわけ，「日本の帝国主義の後進性について」，その「軍人的，空威張的飴細工

25）藤井松一「日露戦争」『岩波講座日本歴史18，現代1』所収，岩波書店，1968年，149ページ。

26）大崎訳『帝国主義論』157ページ。

27）前掲書158ページ。

的帝国主義」の実体を明らかにしようと試みたものであったとされる。そしてそれならば，秋水の古典にみられるところの，「帝国主義一般」（力点大原氏）の論評からはじめ，秋水がそれに多くの紙数をついやしているのはなぜか，と問題を提示される。この歴史的時点において秋水だけが「諸列強の動向」，諸列強の外交政策について鋭い現象把握を可能にした所以は，氏が指摘されるように，すでに秋水が，『自由新聞』『中央新聞』在社時代からロイター通信，外国の新聞諸雑誌などによって細大洩らさず注目し，「朝報社」入社後もひきつづいて関心をあつめてきた問題であった。かれは，1869（明治32）年9月の段階で「外交史」，「外交家伝」に関する著作を出版したいと考えており，そのための「材料」も丹念かつ豊富に収集していたのであった。

こうして秋水が眼前に見すえた諸列強の外交政策（具体的諸現象）を理論的に分析するための基軸をなすものは，大原氏がその論稿において繰返し強調されているところの「自由民権思想によってそめあげられた儒教的倫理観」であった。このような分析の基軸に立って当時の諸列強の具体的な外交政策を観察したとき，かれの視野に大きくうつしだされたのは，強大な軍事力を背景にした諸列強の後進諸国にたいする領土拡張政策であり，また，「小弱」国にたいする「不正な外交政策」をつうじての利権の獲得競争であった。

さらに第4章「帝国主義を論ず」において秋水は帝国主義の本質を，「少数政治家軍人の功名心，少数資本家，少数投機師の利欲の膨脹」にあるとの，いわば経済的根底からの視点・理解に到達しはじめているが，その時点での国内的状況は，すでに「国民挙て此空威張に心酔し，此飴細工に眩」わされていたのであった。なぜ国民は「此空威張的飴細工的帝国主義」に反対しないのであろうか。かえって心酔し，また眩わされてしまうのか。

大原氏は，このような時代的，国民的状況のなかの秋水にとっての，もっとも緊切な課題がなんであったかをつぎのようにとらえられている。「秋水の思考のなかに，藩閥専制政府によって意識的に醸成されてきた『勤王愛国的教育』の弊害がクローズアップされたにちがいない。この『似非愛国心』は，いまや藩閥政府のみならず，かつての民権主義者徳富蘇峰や，雑誌『太陽』の主幹高山樗牛らによって理論的に粉飾され，美化されていた。

秋水は，少数資本家の利欲のためにとられた帝国主義的政策＝軍国主義を批判するまえに，まず，「軍国主義」を助長している「国民挙て」の「似非愛国心」の本質とその危険性とを明らかにしなければならない，と思考したのはきわめて自然の筋道であった」と。

ここには多くの，秋水の古典にたいする批判的論評にみられる「帝国主義」の経済的な基礎からの規定が不足しているといった態の批判に対置して，あの時代状況のなかでの秋水の「似非愛国心」批判の切実な意義が解きあかされているといってよい。「『孟子』第三巻「公孫丑章句」から引用された「惻隠の心」からはじまる第二章，第三章の論理は，自由民権思想にそめあげられた孟子的儒教倫理によってつらぬかれている。それは，秋水の社会主義理論が，まだ

28）大原慧『幸徳秋水の思想と大逆事件』，青木書店，1977年，所収，70—91ページ。

思想として定着していなかったことに起因するが，同時に天皇を楯に「国民」を無視した藩閥専制政府の傍弱無人ぶりにたいする秋水の「王道論」的儒教倫理に根ざした怒りが，「似非愛国心」を批判するというかたちで表現された，ものであった。

秋水の古典は，まさにこの古典成立期における彼の思考に深く儒教的倫理観がいかに貫徹しているかを示す日本の時代的状況，伝統思想の継承から誕生した日本型帝国主義論なのであった。

6. 小括　今日の平和主義として

もとより本稿が対象としてきたものは，秋水の思想と行動の全体像におよぶものではない。ある歴史的時点，いわば瞬間風速のところの観測にすぎない。秋水における思想的・行動的遍歴の――中江兆民の直接的影響をルーツとして，日清・日露を経過するなかの平和主義，そして無政府主義，直接行動論への遍路，ついに大逆事件にいたる――波乱にとんだそのライフ・サイクルのなかでの，本稿はある定点での評価にすぎない。秋水の古典『廿世紀之怪物帝国主義』を結晶ならしめた通過点での認識にすぎない。

国際平和論を構成する要素として，いま私が見いだしたいとしている彼の平和主義での貢献にしてからが，この古典成立以後に続く時期，つまり「萬朝報」の対露開戦論・主戦論への劇的な転回，そしてそれ故の秋水らの「萬朝報」退社，いわゆる寒村の『平民社時代』の開始へ，こうした時代こそ，秋水における平和主義の全貌が顕現し，平和の基礎構造への把握の深化と批判の鋭峰を確証しうる歴史的時点ではあるのだが。

私はここでは専ら「古典を読む」という応接のスタイルに徹して，平和主義の「古典」成立の由縁に学びたいとしたものである。

(1) 後発日本帝国主義の政治的把握

すでにみてきたように秋水の古典への諸家の批判的結論の文字として，「限界」「弱点」「制約」「一面的」などが連発されてきた。要するにレーニン『帝国主義論』の方法を価値基準としての比較吟味であって，その基本は，秋水の古典に，経済過程的分析，経済的基礎の構造的把握にまで目がとどいていないといった態の批判が定石であった。たしかに帝国主義の全体構造は，経済過程的側面の分析と政治過程的側面の分析の両者と，その相互関係的分析にもとづいてはじめて解明がかなうことは，本稿第二節でのべたように，私も承知している。そこのところを『帝国主義論ノート』は簡潔に示している。

帝国主義の定義 { 経済的
　　政治的 { 反　　動
　　民族的抑圧
　　併　　合

『帝国主義論ノート』，(1916年) レーニン全集第39巻729ページ

だが周知のように『帝国主義論』は『ノート』にある「定義」のそのままに全面的な展開がなされているわけではない。帝国主義の「政治的」部分，上部構造の解明（第9章「帝国主義

の批判」には多くの「政治的」示唆がすでにあり，もっとも魅力のある章であると私にはおもえるが）はのぞかれていて「経済的」分析に限られている。だからそこでの「定義」は「政治的」部分を加えれば別に規定されうるという限定付でもあった。

一方，わが秋水の古典は，後発帝国主義としての明治日本の実態，つまり経済的集積力の弱さを明治国家の政治的集積力の相対的な大きさをもってカバーしつつ，近代化と対外侵略の本格化に突入していく，まさにその「政治的」部分，政治過程そのものを，国内体制のみならず，国際的視野のなかに位置づけて批判したものであった。後進帝国主義・明治国家の政治的特性への批判，各階層の人びとにおける後発帝国主義イデオロギーとしてのナショナリズム，それへの批判こそ明治の日本帝国主義論があり，秋水の古典が課題とするものがあったのである。

(2)「愛国心」批判の意味

秋水の古典における「愛国心を論ず」での基本的認識は，まずもって「愛国心」を「動物的天性」にほかならないとし，その国際的な発現は，排外主義の展開にあった。こうした秋水の「愛国心」の帝国主義的性格での把握にたいして，帝国主義を「心理的要因」をもって説明しているにすぎないとか，愛国心への「観念的な排斥」の仕方といった批評が提出されてきた。

だが私には，「愛国心」批判をこととする秋水の帝国主義論の基本部分は，経済的集積の劣弱性を補完する明治国家の政治的集積力を動力として展開した後進帝国主義の日本型エックスパンションにたいする批判として，「心理的」基層までにわけ入った展開として，緊要，適切なものであったと評価しうるのである。明治国家の主動力をなす好戦愛国主義は，憎悪，軽侮，虚栄といった利己の中にのみ浸った個人の人間以下の資質，「動物的天性」に基づいていたのである。F・G・ノートヘルファー氏が更に平明にのべているように，秋水にとって「日本の政府は，平和を探究したり，国内の人々を悩ませている多数の未解決の社会的・経済的問題に焦点を当てたりする代わりに，常に国民の眼の前に『帝国』という人蔘をぶら下げてみせ，さらに『国家の危機』という棒で突っつくというやり方によって彼らの関心を海外に逸らそうと試みているように感じられた。『彼等は実に個人間に於ける憎悪の心を外敵に転向せしめて，以て各々為めにする所あらんとする也』。このような状態の下で，個人は単なる将棋の歩になってしまった。『而して之に応せざるあれば』，と彼は憂慮に満ちて記している――『即ち責めて曰く，非愛国者也，国賊也と』[29]」

秋水の眼前にみてとれる「愛国心」は国家拡張と固く結びついた好戦的なナショナリズムであった。明治日本の大状況のなかでの「愛国心」批判を帝国主義論の中核的部分に位置づけた狙いはあやまたないものであった。「心理的要因」「観念的な排斥」にもとづく平和主義の主張は，平成日本の人びとの在り方，「明治も今もかわっていない国柄[30]」（水上勉）を前提とするとき，国際平和論の祖型が示した緊切な，今日的な平和論構成要素といってよい。

29）F・G・ノートルヘルファー著竹山護夫訳『幸徳秋水―日本の急進主義者の肖像』（1971年）福村出版社，1980年，144ページ。

(3)「志士仁人」による平和

秋水がありていにみた労働者は，階級として未熟な「働く貧民（レイバリング・プーア）」であった。更に広汎にいえば利己的な市民層の存在であった。「責任なきの国民也，識見なきの国民也，意志薄弱の国民也，軽躁浮薄の国民也，人を欺き自ら欺くの国民也，古来如此きの国民にして衰微亡滅に至らざるはあらず」であった。

こうした時代で変革のトレーガーたりうるものは「志士仁人」であり「志士義人」であった。それはたしかに問題の解決をつねに「上からの革命に期待しようとする傾向」（大河内一男稿，前掲注16)）であった。だが私は，明治日本のなかで人格的祖型として提出された秋水のいう「志士仁人」という人間タイプ（「儒教倫理」に基礎をおき，自由民権思想によってそめあげられた—大原慧稿，前掲注28)）は，国際平和論の今日的な課題にとり組むさまざまな人間タイプ（ヴァリアントを派生させるが）の人格的要素，倫理的要素として重視されなければならないものを含んでいると考えている。国際平和論における価値前提のひとつとしての「正義」JASTICE の担い手なくして平和を築くという実践課題はままならない。秋水が見いだそうとして叶わなかった市民的「志士仁人」も，今日においては，言うまでもなく「上から」のでない「下から」の市井の人びとの市民的連帯の，結縁のためのひとつの絆になりうる人間的資質，人間的品性の機根をなすものだといってよい。

さて秋水の古典については諸家によるさまざまな批判的論調があるとはいえ，同時にまた異口同音にその革命家としての秋水像は高くたたえられてきたこともまた言をまたない。代表的な一例をあげておこう。すぐれた『幸徳秋水研究』（青木書店，1967年）をものされた糸屋寿雄氏の同書の末尾の文字である。「その生涯をつらぬいて，つねに日本人民の幸福を念頭第一とし，いささかも私情に煩わされず，身をささげて生涯を人民のために戦った，そのはげしい革命家としての情熱は，片々たるオポチュニストの断じてよくなし得るところではなかった」と。（339ページ）

私にとっては，つまり今日の国際平和論のなかに祖型としての秋水像を位置づけようとするものにとっては，むしろ詩人・嶋岡晨氏による秋水の『日記』についての評言に誘われる。「《土佐派（少数派）》の反骨ぶりをよく語る材料であり，そのことが同時に，明治という時代が示す〈青春〉性，すなわち大いなる飛躍のためのすぐれた反抗精神のありようを，よく代表し要約する31)」それが秋水の『日記』であった。明治という時代が示す「青春性」という記号

30）水上勉『古河力作の生涯』（1973年）文春文庫，1978年，「あとがき」313ページ。
「私は天下国家について大きく発言するのは嫌いである。しかし，天下国家の片隅にあって，天下国家の運命に踏みたたれてゆく小さな人生についての関心はふかくある。今日もその関心はつよい方だ。力作の人生を掘りおこすことで，この国のありようというものに，自然とつきあたり，ひとことでいうなら，明治も今もかわっていない国柄というものについて，ずいぶん考えさせられていった。このことも，「古河力作」から与えられたものというしないだろう」

31）嶋岡晨『明治・青春の夢—革新的行動者たちの日記—』朝日選書，1988年，8ページ。

は，本稿「はしがき」の冒頭に披露した内山愚童の「無政府共産」を「徹底した主権在民」というキー・ワードで強調された表現方法となにか通ずるものがある。(後承)